岡豫風日

〈高知県立歴史民俗資料館だより・おこうふうじつ〉 第43号 2002年3月31日

土佐郷土玩具小史

全国郷土玩具館館長 畑野栄三

全国の郷土玩具を紹介した最古の版画集『うないの友』七編（西沢笛畝著、大正六年刊）に、「土佐高知産（張子人形）相合傘と称する物」として、相合傘の男女が仲むつまじく連れ添っている姿の人形が描かれている。いうまでもなく僧純信とお馬の悲恋物語を人形にしたものである。

『うないの友』

同書の前の頁には、「土佐高知産女達磨（起上り）張子」として、女性らしい細面の顔に目もと涼しく、全体は赤く蛸絞りの模様が描かれ他に見られない秀逸の女だるまである。

この両者はさすがに土佐紙の本場だけに紙の張り子製で、いまも高知県を代表する郷土玩具である。

相合傘は明治中期頃人形師岡本楠次郎により作りはじめられた。もう一つの女達磨は文化年間に御作師が関東だるまに習って作りはじめたといわれているが、これも先の楠次郎により改良され美しい女だるまに仕立てたと伝えられている。

土佐高知産女達磨張子

紙製品では有名な土佐凧がある。同書には描かれていないがこれも古くからあった。

今日、一般に普及している郷土玩具は江戸中期から明治の初期にかけて創始されたものが多く、その主役ともいえるのが京都の伏見人形であった。その存在にはやくから目をつけていた農学者大蔵永常は『広益国産考』（安政六年刊）を著し、『六之巻伏見人形拵様』に、伏見人形に習って土人形の製法を図入りで丁寧に教えている。

そのせいか、かつては全国に二一九の土人形の産地が見られ、そのうち九四の産地が今も作り継がれている（九四年奥村寛純氏調べ）。その中に、あまり知られていないが、高知県の五台山土人形が載っている。

五台山の南麓から海岸にかけ、かつてはデコ谷、人形谷と呼ばれる地名があり、このあたりで明治の中頃まで作られていたのではないかといわれている。

高知の郷土玩具研究家城田政治は『土佐のおもちゃ』（昭和四五年刊）、「土人形」の項で特に五台山とは記していないが、秘蔵の「子持山姥」を写真入りで載せている。これが正しく五台山土人形で、後日『郷玩サロン会報』No.二九で朏健之助も発表しており、県立郷土文化会館に寄贈されたと記している。

土人形に続いて、土人形のもつ重い毀れやすいといった弱点を改良して作られたのが高知の相合傘などの張り子の人形であり、また、鋸屑に糊を混ぜて形成した練り物の人形があるが高知では見られない。これらの人形が、今日各地に見る郷土玩具である。

このようにして作り継がれてきた郷土玩具が、全国的に知られ趣味家に迎え入れられるようになったのは、始めに述べた『うないの友』全十巻である。「うない」とは子供の髪形のことで、子供の友即ち玩具である。

この版画集は明治二四年（一八九一）に初篇が発刊され、六篇までを清水晴風が描き、その後を西沢笛畝が描き大正一三年（一九二四）十篇で終刊となった。

版画集が発刊されるごとに次第に郷土玩具の愛好家が増え、昭和初期頃にはブームとなり各地で話題となった。

「郷土玩具」の新造語が生まれたのはこの頃である。『郷土趣味』という雑誌で田中緑紅が「郷土（的）玩具の話」として、各地の郷土玩具を連載した。その後、『日本郷土玩具』（昭和五年刊）武井武雄著による名著のタイトルになり、「郷土玩具」の熟語が一般に広く使われるようになった。

この頃高知県でも相合傘や女だるまの他に、土佐の面や姉様、室戸の鯨車や鯨舟（木製）などが盛んに作られ趣味家達の注目を浴びる。そして、郷土玩具熱がますます高まった。

このようにして生まれて来た多くの郷土玩具、残念なことに太平洋戦争ですべてが消え失せてしまった。そして戦後、岡林藤吉により伝統的な郷土玩具の復活、いっぽう女流画家山本香泉により新作の郷土玩具の種々が生まれた。画家だけに鮮やかな色彩と形は郷玩趣味家だけでなく多くの人達を魅了した。この二人は既に鬼籍の人であるが、沢山の作品は高知の郷土玩具として今も作られている。（はたの えいぞう）

企画展　会期　平成十四年四月二十六日（金）～六月三十日（日）

「金太郎さんと土佐のおもちゃ ハッケヨイ！郷土玩具」に寄せて

中村淳子

各地の金太郎

■おひなさまから金太郎さんへ

前回の企画展『ふるさと土佐のおもちゃとおひなさま』では、桃の節供のおひなさまが訪れた皆さんを魅了しました。また、「歴民館が贈るこどものための企画展」と銘うち、こどもが楽しく観覧できるよう、「さがしてみよう！かいてみよう」というワークシートを会場に用意しました。

これは、全部で七問のふくろうクイズとともに郷土玩具をひとつ選んでスケッチしてもらうものです。アンケートにも「ふくろうクイズはとてもよかったです。いつもはさっと見て終わる子どもたちも何度も行ったり来たり楽しんでみていました」といったうれしい感想がありました。クイズやスケッチは展示品をじっくり観察してもらうための仕掛けとして考えたものでしたが、うまく機能したようです。一所懸命シートに取り組むこどもたちの姿が会場にみられました。

お友達がかいたスケッチの例

今回の企画展でも新しいふくろうクイズが登場します。また、皆さんが描いたスケッチも展示しますので、おひなさま展をご覧になった方も、再びのご来館をお待ちしています。

さて、郷土玩具にはさまざまな種類がありますが、中でも節供物は、バラエティーに富んでいます。土人形の雄、伏見人形が全国的に知られるようになったのも節供物によってでした。今回の企画展では端午の節供人形を中心に展示しますが、金太郎をはじめ飾り馬や武者人形など、大きくて迫力のあるものが多く、見応え充分です。

おひなさま展に引き続き、高知市にお住まいの山崎茂さんのコレクション約一万二千点から、よりすぐりの郷土玩具をお借りして全部で七百点ほど展示しますので、楽しみにしてください。

スケッチはふくろうポストに投函していただきました。

■端午の節供のキャラクター

端午は五月はじめの午の日のことで、やがて五月五日をさすようになりました。端午の節供は、中国から伝わった災いを祓うさまざまな端午の節供の行事と、日本古来の習俗が合わさり形成されたと考えられています。

金太郎人形は、江戸時代の中頃から端午の節供に飾られるようになったといわれています。金太郎の超人的な姿や怪力に、男の子の健やかな成長を願ったのです。

フラフ（高知県）

金太郎は坂田金時の幼名で、相模国（神奈川県）の足柄山に山姥を母として生まれ、長じては源頼光が率いる四天王の一人となったと、さまざまな物語に伝えられています。金太郎人形は、全身が赤くおかっぱ頭の童子で、鉞をかつぎ熊にまたがる姿などに作られています。赤は神霊、鉞は雷神の武器、熊は山中誕生を象徴するといわれます。また、赤は疱瘡（天然痘）神が嫌うともいわれ、金太郎人形はこどもの病除けや魔除けにされました。

中野土人形の金太郎（長野県）

山姥（熊本県）

なお、展示期間中の五月十一日（土）には、全国郷土玩具館館長の畑野栄三氏の「郷土玩具は楽しい―お節供に人形を飾るわけ―」と題した講演会を開催します。郷土玩具と節供の深い関わりや全国各地の郷土玩具の魅力について、第一人者の幅広い見識からお話いただけることと思います。

ところで、五月の空に翻るのは鯉幟が一般的ですが、土佐には大漁旗に似たフラフがあり、金太郎や武者など端午の節供のキャラクターが描かれてきました。そこで今回の土佐の郷土玩具のコーナーには、町絵師、絵金の弟子だった初代から数えて四代目の吉川登志之さんの迫力あるフラフなども展示します。また、凧といえば正月の風物詩としてなじみがありますが、端午の節供に凧を揚げる地域が土佐の他、各地にあり、そうした凧も一部紹介したいと思います。

■山崎茂さんの秘蔵っ子たち

金太郎ひとつとってみても、山姥金時や熊金、鯉金とさまざまなバリエーションがあり見飽きませんが、きんたろうコーナーには、桃太郎や浦島太郎といった昔話のキャラクター、源義経や平敦盛などのりりしい武者人形、折り紙の兜をかぶった愛らしい男の子の人形など、「端午の節供と男の子」をキーワードに全国各地の郷土玩具を山崎さんのコレクションから紹介していきます。「加藤清正と虎」など二体が組みになった大浜土人形、あるいは香泉人形や伏見人形の大きな飾り馬も見所です。

そもそも山崎さんのコレクション第一号は、申年のお生まれにちなんで宮崎県の昇り猿だったそうです。これは幟に吊り下げられ風で幟がふくらむと竿を昇るユーモラスな猿の郷土玩具です。この昇り猿をはじめ、山崎さんが「端午の節供人形には大物が多く郷土玩具で最も見応えがある」と勧める人形たちに、ぜひ会いに来てください。

また、四月二十七日（土）と五月四日（土）の展示室トークでは、収集者の山崎さんご本人から、それぞれの展示資料について語っていただきます。

大浜土人形の「加藤清正と虎」（愛知県）

企画展　長宗我部元親・盛親の栄光と挫折　記念講演会　講演録

長宗我部信親の見た南蛮都市府内

大分市教育委員会　秦　政博

豊後と土佐の縁

豊後と土佐の縁は大変古く、そして深いものがあったといえましょう。国東半島の先に姫島という小さな島があるのですが、ここから採れる黒曜石の石鏃は、佐川町の不動ヶ岩屋洞穴遺跡や四万十川流域でも出土していますから、四・五千年も前から海の路を通じて両地域間に交流があったということになります。また、南北朝期に活躍する堅田氏は元々豊後佐伯の土着武士でありましたし、幡多郡中村城主の土佐一条氏には、キリシタン大名として著名な大友宗麟の姉・娘が嫁いでいます。一条兼定が土佐を追われた時も匿ったのは宗麟であり、再度土佐に向かう際には、日出の真那井衆に警固船を出させたりもしています。江戸時代になって、府内藩は、城（大分市）の築城に際して巨木を探しますが、豊後国内で入手することができず、わざわざ土佐まで船をおくり、上品質の木材を得たことが記録されています。

しかし、何といっても両者の縁を語るうえで忘れてならないのは、大友氏救援のため派遣された、長宗我部氏ら四国衆の援軍と島津氏が激突した、いわゆる戸次川合戦であります。この歴史的大事件は、四百年を経た今日でも、高知・大分両県において語り継がれております。

豊薩合戦に至る経過

ここで、豊薩合戦に至る経緯を簡単にご説明しておきましょう。天正六年（一五七八）、日向での合戦に大敗したことがきっかけで、大友宗麟の力は目に見えて衰えてきます。日向遠征の目的は、この地にキリシタン王国を建設することでしたが、三万もの戦死者を出したことから、重臣の中からは日本の神をないがしろにした天罰だと公言する者も出る始末でした。真っ先に離反の先鋒を切ったのは竜造寺隆信をはじめとする肥筑方面の諸将でした。敗戦直後、隆信は筑後を攻め、これに呼応して蒲池、草野、黒木の士などが宗麟に反します。天正九年頃には竜造寺氏は九州北西部において一大勢力を築き、大友・島津氏らと鼎立するようになりました。一族の中からも離反するものが現れます。一族の田原親宏（国東田原氏の惣領家）・田原親貫（親宏の養子）、そして、田北紹鉄が謀反。いずれも身内・重臣たちであり、大友氏はまさに四面楚歌、内憂外患、浮沈の瀬戸際に立たされました。

そうした渦中にあっても、決してキリシタンとしての信仰を捨てなかった宗麟は、本拠地府内の整備に心血を注ぎ込み、ひたすらその信仰世界のなかで魂の救済を得ようとしたようです。

南蛮造りの商都

府内は、元々国府の置かれていた政治・経済の要衝であり、平安時代の河原市から発展していったと考えられています。鎌倉・室町期には府中と呼ばれておりました。そして宗麟の時代には、九州を代表する物資の集散地になっていました。現在、大友氏館跡整備事業に伴う発掘調査により、その繁栄ぶりを示す遺構・遺物が続々と発見されています。わたくしは、昭和六十年代に『大分市史』を編纂しました。その時、何点か確認されておりました「府内古絵図」を明治初期の地籍図のうえにあてはめる作業をしました。すると大友館をはじめとする建物の位置やその他の内容がほぼ一致することに気付きました。今回の発掘によってこの「古絵図」の信憑性が一気に高まったといえます。府内は絵図に描かれたとおり日本有数の南蛮造りの町、そして国際貿易都市であったのです。

町の規模は東西約七百メートル、南北約二・二キロメートル。ダイウス堂と呼ばれる府内教会、日本最初の西洋式病院、学校（コレジオ）また唐人町という外国人居住区などがありました。町の中心には大友館、隣接して倉庫群。町は全部で四十一町でほぼ長方形をなし、要所要所に木戸や寺が配されていました。町には溢れんばかりの南蛮の物品が見られたようです。いま大友館周辺の発掘現場からは、タイ・ベトナム・ミャンマー・朝鮮・中国華南産陶磁器などが次々に掘り出されています。また、横小路町（現錦町の一部）には、十メートル幅の大路が走り、道路沿いには備前焼きの大甕を十も備えた大商店の跡も見つかっています。本当にその多彩さは中世博多などのそれに勝るとも劣りません。町の核をなす大友館は方二百メートル、面積は四万平方メートルにも及び、室町将軍邸とほぼ同

じ広さです。この中に主殿や会所（接待所）があったと思われます。ステータスシンボルである庭園は池をともなって発見されました。巨石（景石）を配した東西約六十六メートルもの規模を持ち、西の都と称えられる山口の大内氏館をも上回ります。池庭の一帯からは京都風の土師器（盃）、茶臼、天目茶碗などの茶道具類も夥しく出土しています。これは大友家と茶の湯を考えるうえで極めて重要な発見です。一度使用したら二度と使われなかったという無数の土師の盃に、賓客や家臣を相手に催された宴の数々が想像されます。これらの盃のなかには、大友館に招待された元親・信親親子の口に運ばれたものもあったでしょう。宗麟らと一献かたむけ合う姿を想像するのも楽しいですね。

館の南東部と思われる位置からは銅銭・繭型分銅らとともに、直径二cmほどのメダイ（メダル）が出土しました。片面にはイエスを抱いた聖母マリア、もう一面にはイエスと思われる顔が描れているものと思われます。こういったキリスト教関係資料の出土は、南蛮都市府内の特性ともいえると思います。

戸次川合戦と信親

この南蛮都市府内を根拠地とし、栄光に包まれた時代は過ぎ、大友氏の栄華も終焉を迎えます。それを決定付けたのが、勢力を蓄え侵攻を開始した島津勢との対決でした。

天正十四年正月、島津氏は参宮して戦運を占います。結果は「肥後口と日向口との双方向から豊後を攻めるべし」というものでした。豊臣秀吉は島津氏に対して豊後への戦を仕掛けぬよう働きかけますが、島津氏側はこれを無視し従いません。単独で抵抗しえぬことを悟っていた宗麟は、事態の急を感じて臼杵から海路大坂城の秀吉に救援要請に赴きますが、そのとき秀吉は上機嫌で宗麟を接待し、援軍を約束しています。天正十四年七月十七日付の秀吉書状によると、長宗我部元親・信親親子に援軍を指示したことが述べられ、場合によっては毛利氏や秀吉自身も赴くとの内容が記されております。援軍が遅れたのでしょうか、その後「四国勢が来るまで事を構えず待つように」との書状（八月二十五日付け）が出されています。それからそう遠くない日に四国勢が到着したようで、その数、長宗我部勢三千、仙石勢二千、十河一千と伝えられております。そうこうしているうちに十月十五日に梓峠（宮崎・大分県境）を越えた島津軍は、お告げのとおりに日向口と肥後口の両方向から攻め入ります。

十二月五日、島津軍は現在の大分市の南端に位置する山城、鶴賀城を包囲します。城主の利光宗魚は戦闘中に戦死し、生き残った城兵はその死を隠し、徹底抗戦したのでした。この島津軍の包囲戦によって落城の危機にさらされた鶴賀城を救援すべく、大友・四国連合軍が鶴賀城に向かったのです。

この戦闘の結果、軍監仙石秀久は敗走、十河存保は討死、長宗我部親子と桑名太郎左衛門らは一時鶴賀城の麓付近まで敵を押し返しますが、数に勝る島津勢に翻弄され、親子は離ればなれになります。元親には伊集院美作隊が、子息信親には新納大膳正隊が襲いかかりました。さらに迂回してきた本庄主税助の軍が来襲すると四国勢は総崩れとなり、信親も奮戦むなしく戦死したといわれています。

「土佐守信親、心はやりの大将にてあまり深入りしたまい、命も惜しまず攻めたまい、痛手数カ所を負いたまいて討たれける」（『豊筑乱記』）

「長宗我部元親の勢いとって返ししばらく競い合い、元親の子息孫太郎信親進み出てしばらく戦うて討ち死にす」（『大友興廃記』）

いずれも江戸時代の史料ですが、悲壮な決意をもって戦死した信親の最期がひしひしと伝わってきます。

この信親の戦死によって長宗我部家は衰えていきます。また、府内の町を島津軍によって焼き払われた宗麟は失意のうちに病死することになります。つまりこの戸次川合戦は、長宗我部・大友両氏の衰退を決定づける戦いとなった訳です。こうしたことからも土佐と豊後の奇縁を感じずにはいられません。

主戦場となった戸次川（現大野川）の河原を見おろす山崎の丘には信親の墓があり、地元の人たちによって今もなお大切に供養されています。

物質的には豊かになったものの、日本人としての精神的土壌が希薄になりつつある今日、郷土の歴史を知る機会をいかに学校教育のなかで確保していくか。今、私の最も関心あるテーマであります。

（文責野本）

土佐の民具 6

臼

坂本　正夫

臼は近年まで穀物の脱穀や精白、製粉、餅搗き用の道具として広い範囲で使用されていたが、大別するとツキウス（搗臼）とヒキウス（挽臼）及びスリウス（摺臼）の二系統に分かれます。

搗臼

木または石で作り、形はタテウス（竪臼）が一般的ですが舟形をしたヨコウス（横臼）もあります。木臼には松や欅、桜、サルスベリ、栃などの木が使われ、樹芯をくりぬいて作り、その窪みに原料を入れテギネ（手杵）で搗いていました。

手杵は松や樫、椿、サルスベリなどで作り、両端が太く真中の握る部分を細くした棒状のタテギネ（竪杵）と、槌形で柄の長いヨコギネ（横杵）の二種ありましたが、前者が古い形態です。

搗臼は腕力によって作業が行われていましたが、横杵の柄を長くして、その中間を支柱で支え梃子（てこ）の原理を用い、一方を足で踏んで搗くのがダイガラウス（台唐臼）です。この足で踏む搗臼は更に進歩して、水を利用したソーヅ（水車）を生みだし、それは長いあいだ農山村の風物詩でした。なお、土佐で石の搗臼が普及するのは明治以降のことですが、山間部では後々まで木臼が使われていました。

天保３年製作の木の竪臼（右）と粉挽き用の石臼
（佐川町立歴史民俗資料館）

台唐臼（本館の民家の屋内）

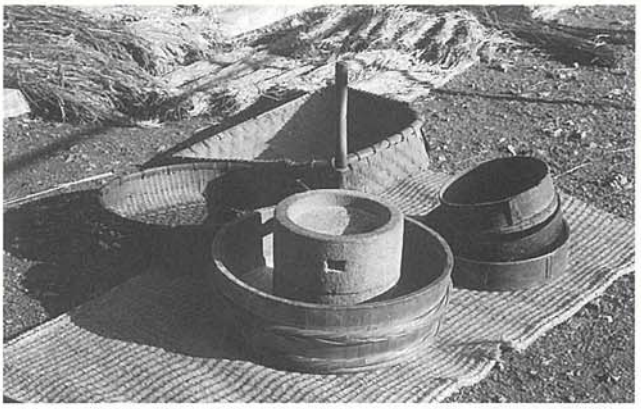
挽臼

一般に挽臼といえば石臼をさします。上臼と下臼を重ね合わせ、接合面には目が切られており、上臼には回転の力を加えるヒキギ（挽き木）がありますが、ヒキワリ臼、コンコ臼、茶臼、味噌臼などの種別があります。

ヒキワリ臼はトウモロコシや麦を挽き割る臼、コンコ臼はトウモロコシや小麦をコンコ（粉）にする臼です。小さな臼なら一人で挽きますが、大きな臼は二人で挽きます。大臼にはヤリ木がついており向かい側の者がヤリ木を引き、手前の者は穀物が適当に臼の穴に入るように片手で混ぜながら挽いていました。

挽臼は専門の石屋（石工）が製作していましたが、明治期にこのような石工がいたのは高知市のほかに室戸、田野、安芸、赤岡、山田、本山、伊野、高岡、須崎、窪川、中村、宿毛などがありました。池川や檮原へは愛媛県久万の石臼、土佐清水市や大月町、西土佐村などへは宇和島の石臼が入っていました。

臼は食物を扱う道具だから神聖なものだと考えられ、民俗儀礼や俗信のうえで重要な役割を果たしていました。たとえば小正月には餅搗臼を正月神の祭壇にし、これに鎌、鍬、手斧などを並べ、餅や神酒、お注連などを供えて祭る所があちこちにありました。新築の家には最初に臼を運び入れるものだ（佐川町）とか、火事の時は真先に臼を持ち出せ（春野町・池川町）といわれていた所もあります。また幡多地方には盆踊りや葬式に臼を据える所がありますが、これは臼に霊が宿っていると考えられていたからなのです。


挽きわり臼と関係民具（はんぼう・茶おろし・おろし・箕）
（仁淀村大植）

火おこしの体験学習から

昨年十二月十四日に社会科見学で来館の土佐山田町立繁藤小学校五・六年生五名（明石校長、谷岡教諭引率）が火おこし体験を行い、二時間かけて見事、全員の連携プレーで火がつきました。

後日、当館へ坂本佳奈さんがその時の様子を生き生きと綴った日記を送ってくださいましたのでご紹介します。

むずかしすぎや

今日、社会見学で歴史民俗しりょうかんへ行きました。とてもこの日が楽しみでした。

「おはようございます！」

と、カウンターの人に大きな声で言いました。さっそくてんじぶつの説明を聞かしてくれました。

「へえー、すごいね」

と感心しながら聞きました。またほかのてんじぶつを歩き見しました。

「そろそろ火おこしの方に…。」

と、かいだんを下りていきました。そしたら、四人の人が立っていました。

「おはようございます。」

と大きな声で言いました。そこには、いろいろな道具が置いてありました。

「じゃあ、佳奈コレ。」

と、真っ先に取りました。そして、やり始めました。

「あれっ、ならんで。」

なんか、自分のだけ上手くできなかったです。

そして、みんなよりおくれたけど、でき始めました。けど…

「えー！おもくなる！」

と大きい声を出して、あわててしまいました。

「ちょっと」

と、妙ちゃんの道具を取りました。そうしたら、かるくなったと思ったら、おもくなりました。なんで？と思いました。

さわもとさんがずっとお世話してくれていました。だんだんみんな火がつき始めて、由衣ちゃんと有実ちゃんと沙紀ちゃんがつきました。

「佳奈と妙子だけやんかー。」

と言いました。がんばって二人でやることにしました。

「チームワーク♥チームワーク♥」

と言いながらやりました。

「妙ちゃん、はいっ！」

とバトンタッチしてもらうと、チームワークが悪かったせいか止まってしまいました。

「もー佳奈ちゃん。」

「もー妙ちゃん。」

と二人で言いました。もう全然いかなかったので、

「先生！コツはなんですか？」

と聞くと、さわもと先生が、

「コツはない！根気だけ！」

と言ったので、

「根気♥根気♥」

と言いながらやりました。

そして、沙紀ちゃんが入ってくれて、三人でしました。

「はいっ！佳奈ちゃん！」

「はいっ！妙ちゃん！」

「はいっ沙紀ちゃん！」

とチームワークを守って努力しました。だけど、火がつかなくてもうつかれはてました。

と、そのとき校長先生がやってきました。校長先生は、すばやく手を動かしました。そして沙紀ちゃんへバトンタッチ！やっと、やっとやっと火がつきました。そのときは、もうむがむ中で、

「先生、早く！写真とって！」

と急いでいました。火が消えないように、いつまでもあらをたしていました。消えたときは、

「あー。」

と落ちこみました。

だけど、その火は、校長先生と沙紀ちゃんがおこした火なので、妙ちゃんと佳奈は今日は火をおこしてないということなので、ちょっとガックリしました。

けど、私たちのために寒い中、朝からいろいろ準備してくれた四人の人に感謝しています。最後に、四人のサインをもらって帰りました。とても楽しかったです。ありがとうございました。

催しもの 2002年4月～6月

企画展

金太郎さんと土佐のおもちゃ ハッケヨイ！郷土玩具

4月26日(金)～6月30日(日)

ふるさと土佐で作られ愛されてきたおもちゃを山崎茂さんの郷土玩具コレクションから紹介する企画展の第二弾です。

今回は土佐の郷土玩具と全国各地の端午の節供人形、あわせて約700点を展示します。節供人形には「弁慶と牛若丸」や「加藤清正の虎退治」など、二体が組になった大型の土人形があり見応え充分です。また、全国各地の金太郎や饅頭喰いなどを多数展示します。金太郎にも熊と相撲をとるものや山姥に抱っこされたものなどいろいろあり親子で楽しめます。

土佐の郷土玩具は第一弾の「ふるさと土佐のおもちゃとおひなさま」とコーナーは同じですが、100点ほど入れ替えて展示し、土佐の節供物では吉川登志之さんのフラフや土佐凧、山本香泉さんの力士などを展示します。「郷土玩具であそぼう！」コーナーの遊べる郷土玩具や「ふくろうクイズ」も一部変更しますので、再度ご来場いただけると幸いです。

○講演会　5月11日（土）14:00～16:00
「郷土玩具は楽しい―お節供に人形を飾るわけ―」
畑野　栄三　氏（全国郷土玩具館館長）

定員　100名（葉書か電子メールでお申し込みください。）

○展示室トーク　4月27日（土）、5月4日（土）
14:00～15:00
山崎　茂さん

申込不要ですが、入館料が必要です。（先着30名）

図録販売中

「ふるさとのおもちゃ」
800円（送料310円）

「土佐　2000年―21世紀へ伝える文化遺産」
1,200円（送料310円）

「長宗我部元親・盛親の栄光と挫折」
800円（送料310円）

「居徳遺跡」　1,000円（送料240円）

郵便振込 01610－2－61369
（財）高知県文化財団

5月3日は歴民の日
（入館料無料です）

ワクワクワーク

5月18日(土) 10:00～11:00
「土佐民話の家⑨」　市原麟一郎さん
電話かEメールでお申し込みください。（先着30名）

史跡めぐり

5月25日（土）
「香川県善通寺市」
専用の申込書をご請求ください。
5月7日（火）締め切り

《ひとこと》

おひなさま展では当初五百点展示する予定でしたが、いつの間にか八百五十点に増えました。たくさんの郷土玩具をお貸しくださった山崎茂さんに感謝です。引き続き、金太郎さん展もご期待ください。（中村）

月・日	主な出来事
2／2	企画展「ふるさと土佐のおもちゃとおひなさま」開幕、展示室トーク
2／11	史跡めぐり「仁淀村秋葉まつり」
3／2	ワクワクワーク「土佐民話の家⑧」
3／9	展示室トーク
3／16	ワクワクワーク「張り子をつくろう①」
3／23	ワクワクワーク「張り子をつくろう②」

岡豊風日（おこうふうじつ）第43号
平成十四年三月三十一日
編集・発行　高知県立歴史民俗資料館
〒783－0044　南国市岡豊町八幡1099－1
TEL　088－862－2211
FAX　088－862－2110
開館時間　午前9時～午後5時
（入館は午後4時30分まで）
休館日　毎週月曜日（祝日及び振替休日にあたる場合は翌日）12月28日～1月4日、臨時休館日あり
入館料　通常期［常設展］大人（18歳以上）450円・団体（20人以上）360円
高校生以下、療育手帳・身体障害者手帳・障害者手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者（1名）、高知県及び高知市長寿手帳所持者は無料　印刷・㈱飛鳥
http://www2.net-kochi.gr.jp/~kenbunka/rekimin/
E-mail:rekimin@tosa.net-kochi.gr.jp